

神奈川新聞 2011年6月12日(日)のかながわの本欄にて、「南北戦争記」が紹介されました。

## 「南北戦争記」

北軍の勝因は何だったのか。あるいは国民世論の後押しが利いたのだろうか、どうかつに考えていた。が、とんでもない。初め劣勢だった北軍が情勢をひっくり返したのは兵力と物量、なかでも兵器体系、もっと言えば砲の差である。砲兵の砲撃戦術もそうだが、北軍には優れた軍需工場があった。ピュリツァー賞受賞作家の訳書。ゲティスバーグの戦場から小競り合いに至るまで、戦いの足どりを中心に政治的、経済的背景、欧州各国の思惑なども細かく書き込んで



かながわの本

### 米軍戦略のヒナ形がここに

いる。目を引くのは「何でもあり」の軍事行動だ。鉄道を壊す、工場に火をつける、物資を奪う……。これは第2次大戦以降、力づくで民間社会を巻き込み、圧殺する米軍戦略のヒナ形そのものではないか。初めのころは市民がピクニック気分で戦争見物するほど牧歌的だったが、やがて酸鼻を極める。両軍の死者61万超。チフス、赤痢など病気で命を落とす例がかなりを占めたという。奴隷制廃止を唱えるリンカーンは土壇場で暗殺される。この政治家が人心収攬の名手らしいのも興味深い。訳者は横浜市南区に住む。グラント將軍、リー將軍などの人名索引、肖像、地図、注釈など懇切な資料を添えたのは訳者の見落とせぬ労作だ。

ブルース・キャットトン著、益田 育彦訳

(パベルプレス ☎03・5211・3727、1680円)